

志木市の文化財 第20集

し き し
志 木 市 遺 跡 群

V

1 9 9 3

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太蔵

このたび、平成3年度の志木市遺跡群発掘調査の成果を報告書として刊行することができたことを喜ばしく思います。

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、市内の地形は大まかに、市域中央を流れる新河岸川を境に西側が武蔵野台地と呼ばれる洪積台地、東側が荒川の形成した沖積地である荒川低地に分かれます。こうした自然環境の下、洪積台地の縁辺には埋蔵文化財の包蔵地が少なからず存在しています。

しかし、埋蔵文化財の包蔵地の集中する洪積台地上の志木市本町・柏町・幸町地区は、市街化の最も激しい地域であります。

そういう状況下において、誰かが、これらの文化財を保護・保存していかなければ、これらは破壊され、後では取り返しのつかない結果に終わってしまいます。文化財は私達の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。また、知識であり技術でもある、いわば新しい文化を創造のための頭脳とも言えるのではないのでしょうか。

本来、これらの貴重な文化財は完全な形で保護・保存していくことが望ましいのですが、教育委員会では各種の開発に伴う埋蔵文化財の保存に関しては、主に発掘調査による記録保存で対処しております。

また、発掘調査を実施するにあたり、開発側と文化財保護側との間にはたびたび調査費用の負担や調査期間の問題などによるトラブルが発生し、文化財保護行政を推進する上で大変難しい局面をもっています。そこで、今日においては何よりも、開発側と文化財保護側の双方が、円滑に事業を進めて行けるよう努力することが急務ではないかと考えております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の多くの方々のご指導に深く感謝するとともに、本書が郷土の歴史研究のために広く活用されて頂ければ幸いに存じます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成3年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成3年4月1日より平成4年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成は、志木市教育委員会が行い、編集・執筆は尾形則敏が担当した。また、近世の陶器については、朝霞市教育委員会の野沢 均氏にご教示を賜った。
4. 挿図版の作成は、佐々木保俊・深井恵子が行い、伊野部三千子・内野美津江の協力を得た。
5. 遺物の実測は、深井恵子・尾形が行い、トレースは佐々木が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版第9図のドットは、土器出土位置を示し、「←」・「-」印は、鉄錐の出土位置を示し、錐身部が確認できた場合は、その方向を「←」で表している。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

H = 古墳時代の住居跡 D = 土坑

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

担 当 課 社会教育課文化財保護係

教 育 長 秋山 太蔵

教 育 総 務 部 長 星野昭次郎

社 会 教 育 課 長 並木 勝司

文 化 財 保 護 係 長 岡本 孝

文 化 財 保 護 係 主 査 佐々木保俊

“ 主 事 尾形 則敏・今野 美香

発 掘 調 査 担 当 者 佐々木保俊・尾形 則敏

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・石井 寛・井上洋一・岩本克昌・梅沢太久夫・岡田威夫・岡本東三・織笠 昭・織笠昭子・片平雅俊・倉沢和子・栗島義明・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・笠森健一・新波 治・白石浩之・実川順一・

鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木正博・鈴木重信・田代 隆・田中英司・田中広明・坪田幹男・
中島岐視生・中村倉司・並木 隆・根本 靖・野沢 均・野中 仁・早川 泉・早坂廣人・
藤波啓容・松本 完・松本富雄・柳井章宏・和田晋治・渡辺邦仁

9. 発掘調査及び整理作業参加者

市場裏遺跡第3地点

発掘協力員

清水加代・宮本田ず子・村井京子

整理協力員

内野美津江・村井京子・吉谷顕子

中野遺跡第18地点

調査補助員（発掘調査及び整理作業）

深井恵子

発掘協力員

内野美津江・清水加代・宮本田ず子・村井京子・吉谷顕子

整理協力員

内野美津江・村井京子・吉谷顕子

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第1章 平成3年度調査成果の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査成果の概要	3
第2章 市場裏遺跡第3地点の調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 弥生時代の遺構と遺物	8
第3節 包含層出土の遺物	8
第3章 中野遺跡第18地点の調査	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 検出された遺構と遺物	11
第3節 まとめ	16

図 版 目 次

図版1 市場裏遺跡第3地点	(上) 調査区近景 (下) 確認調査風景
図版2 "	3号方形周溝墓、3号方形周溝墓・包含層出土遺物
図版3 中野遺跡第18地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版4 "	(上) 古墳時代9号住居跡 (下) 9号住居跡遺物出土状態
図版5 "	9号住居跡遺物出土状態
図版6 "	3号土坑出土遺物、9号住居跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図 市域の地形と調査地点(1/2000)	5
第2図 周辺の地形と調査地点(1/5000)	7
第3図 遺構分布図(1/300)	8
第4図 3号方形周溝墓(1/60)	9
第5図 3号方形周溝墓出土遺物(1/3)	9
第6図 包含層出土遺物(1/4)	9
第7図 周辺の地形と調査地点(1/5000)	10
第8図 遺構分布図(1/300)	11
第9図 3号土坑・9号住居跡(1/60)	12
第10図 3号土坑出土遺物(1/3)	12
第11図 9号住居跡出土遺物1(1/4)	13
第12図 9号住居跡出土遺物2(1/2)	14
第13図 鉄線の各名称とよみかた	17

第1章 平成3年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、市域はおおよそ南北4.2 km、東西4.4 kmの広がりを持ち、面積は9.07km²を測る。地理的景観を眺めてみると、市域東部の宗岡地区には、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が大きく広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、河川は荒川が市域東部を南東流し、柳瀬川が市域西部から中央部にかけて北東流し、市域中央付近で新河岸川に合流する。

こうした自然環境の下、西原大塚遺跡をはじめとする大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。

当市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅－池袋駅間を急行で20分ほどというように交通の便にも恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして、昭和40年前後から急激に人口増加の傾向をみせてきた。最近では営団有楽町線乗り入れが開始し、この傾向がますます顕著になってきている。

これに伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設に占める割合が高く、小規模

番号	調査地点	所在地	面積 (㎡)	調査期間
1	市場遺跡第6地点	志木市本町2丁目1626-6	71.10	平成3年4月18日
2	富士前遺跡第3地点	本町3丁目1864-1	104.32	4月23日
3	西原大塚遺跡第19地点	幸町3丁目3135-5,7	37.15	4月24日
4	本町4丁目	本町4丁目1015-28,29	361.76	5月10日
5	西原大塚遺跡第20地点	本町4丁目3401-11	64.90	5月15日
6	市場遺跡第7地点	本町2丁目1633-6,20,21	210.01	5月20日
7	西原大塚遺跡第21地点	幸町3丁目3136-7	265.73	5月23日
8	市場裏遺跡第2地点	本町1丁目2513-5	407.90	6月11日
9	本町4丁目	本町4丁目1146-17	65.97	6月13日
10	中道遺跡第24地点	柏町5丁目2985-1	338.37	6月13日
11	市場裏遺跡第3地点	本町1丁目2489-12	162.34	6月18日～6月26日
12	市場遺跡第8地点	本町1丁目1588-3	1195.30	6月19日
13	中道遺跡第25地点	柏町5丁目2922-8	131.89	6月26日
14	中野遺跡第18地点	柏町1丁目1507-3	171.44	7月8日～7月24日

(第1図の番号と一致)

番号	調査地点	所在地	面積 (㎡)	調査期間
15	本町4丁目	志木市本町4丁目1015-44	184.82	7月15日
16	西原大塚遺跡第22地点	幸町4丁目3377-1、4、23	549.00	7月15日
17	西原大塚遺跡第23地点	幸町2丁目3045-2	176.64	7月19日
18	本町4丁目	本町4丁目1143-119	94.66	8月1日
19	市場裏遺跡第4地点	本町1丁目2521-2他	11264.00	8月2日
20	田子山遺跡第14地点	本町3丁目1818-24	55.83	8月28日
21	中野遺跡第19地点	柏町1丁目1486-2、3他	179.24	8月27日
22	富士前遺跡第4地点	本町3丁目1864-1	158.16	9月10日
23	本町4丁目	本町4丁目1109-22、23	149.07	9月20日
24	西原大塚遺跡第24地点	幸町3丁目3124-2、3	132.66	9月22日
25	田子山遺跡第15地点	本町2丁目1689-9	52.18	9月26日
26	中野遺跡第20地点	柏町1丁目1484-4	181.34	10月2日
27	中道遺跡第26地点	柏町5丁目2494-1	897.02	10月9日
28	中野遺跡第21地点	柏町1丁目1482-6、7	118.42	10月31日
29	富士前遺跡第5地点	本町3丁目1883-1	127.73	11月5日
30	富士前遺跡第6地点	本町3丁目1880-3	198.34	11月6日～9日
31	中野遺跡第22地点	柏町1丁目1528-15	67.48	11月7日
32	中野遺跡第23地点	柏町2丁目1210-9	191.30	11月25日
33	中野遺跡第24地点	柏町2丁目1209-2	303.00	11月25日
34	本町4丁目	本町4丁目1107-4	249.70	12月3日
35	市場遺跡第9地点	本町2丁目1632-20、21	82.99	12月7日
36	田子山遺跡第10地点	本町2丁目1660-1、2、4他	2793.83	12月18日
37	水川前遺跡第3地点	柏町4丁目2683-6他	160.29	平成4年1月27日
38	中野遺跡第25地点	柏町1丁目1501	883.00	2月12日
39	市場遺跡第10地点	本町1丁目1595-1	1320.67	2月15日
40	市場遺跡第11地点	本町1丁目1594-2	224.92	2月17日
合 計			24384.47	

(第1図の番号と一致)

開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する志木市本町・柏町・幸町地区は市街化の最も激しい地域になっている現状も遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を行っていく上で、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

さて、本市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いが、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など困難な点が多かった。そのため、昭和62年度からは国・県より補助金の交付を受け、こうした深刻な事態に対応してきている。さらに、確認調査については、民間・公共事業を問わず、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に遂行している。また、最近、人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以降、個人住宅建設に伴う調査件数は、共同住宅を2位におさえ、首位に浮上した。

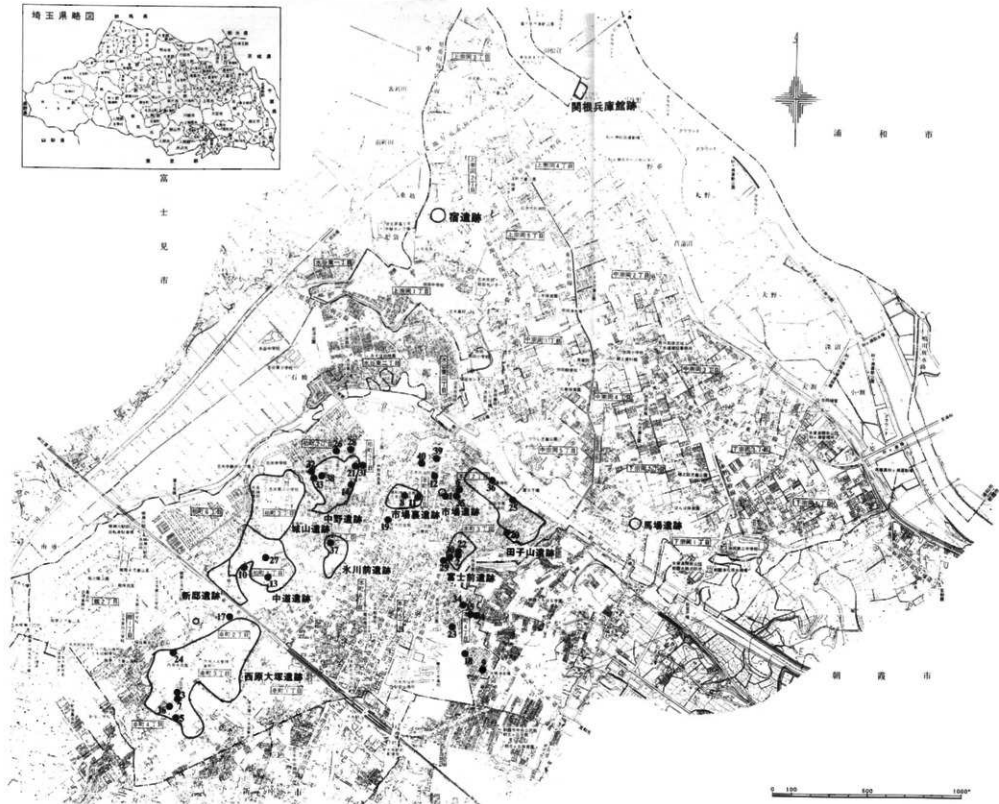
平成3年度は、確認調査・現地踏査を併せて40地点の調査を実施した。そのうち、教育委員会が実施した発掘調査は2地点、志木市遺跡調査会が実施したものは4地点である。前年度比では、件数がほぼ同数にもかかわらず、面積が約2倍に増加した。

なお、工事内容の内訳件数は、個人専用住宅18件、共同住宅10件、宅地造成3件、事務所兼共同住宅2件、事務所1件、事務所併用住宅1件、店舗併用住宅1件、ガソリンスタンド1件、駐車場1件、校庭整備1件、公園整備1件である。

第2節 調査成果の概要

1. 市場遺跡第6地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
2. 富士前遺跡第3地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
3. 西原大塚遺跡第19地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
4. 本町4丁目1015-28、29 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
5. 西原大塚遺跡第20地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
6. 市場遺跡第7地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
7. 西原大塚遺跡第21地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
8. 市場裏遺跡第2地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
9. 本町4丁目1146-17 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
10. 中道遺跡第24地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
11. 市場裏遺跡第3地点 後述。委保第5の3905号、平成3年10月11日付。
12. 市場遺跡第8地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
13. 中道遺跡第25地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。

14. 中野遺跡第18地点 後述。委保第5の4104号、平成3年10月11日付。
15. 本町4丁目1015-44 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
16. 西原大塚遺跡第22地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
17. 西原大塚遺跡第23地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
18. 本町4丁目1143-119 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
19. 市場裏遺跡第4地点 現地踏査。遺構・遺物は検出されなかった。
20. 田子山遺跡第14地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
21. 中野遺跡第19地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
22. 富士前遺跡第4地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
23. 本町4丁目1109-22,23 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
24. 西原大塚遺跡第24地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
25. 田子山遺跡第15地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
26. 中野遺跡第20地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
27. 中道遺跡第26地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
28. 中野遺跡第21地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
29. 富士前遺跡第5地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
30. 富士前遺跡第6地点 確認調査。発掘調査を実施したが、結果的には倒木痕と判断し、中止。
31. 中野遺跡第22地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
32. 中野遺跡第23地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
33. 中野遺跡第24地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
34. 本町4丁目1107-4 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
35. 市場遺跡第9地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
36. 田子山遺跡第16地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
37. 水川前遺跡第3地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
38. 中野遺跡第25地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
39. 市場遺跡第10地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
40. 市場遺跡第11地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。



第1図 市城の地形と遺跡分布 (1/20000)

第2章 市場裏遺跡第3地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

市場裏遺跡は、志木市本町1丁目を中心とする遺跡で、柳瀬川の右岸流域の台地上に立地している。しかし、細かくみると本遺跡の西方に南北方向に走行するやや深い谷に沿って形成された遺跡であるともいえる。標高は東端の高い位置で約16m、西端の低い位置で約13mを測り、西側はそのまま深い谷に入り込んでいる。また、深い谷に沿って、県道川越・新座線が通っており、建設工事の際に本遺跡の西端部分をかなり破壊したことがうかがわれる。

本遺跡は、平成2年7月に実施された第1地点の発掘調査を契機に見えられたばかりで、その調査では弥生時代後期の住居跡が一軒検出されている。また、翌3年6月の第2地点の発掘調査により、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓が2基検出されていることから、現時点では該期を中心とした性格の遺跡であるといえる。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成3年6月18日から開始した。調査区の長軸に合わせ、ほぼ南北方向に2本のト



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

レンチを設定、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区北東端より弥生時代後期の方形周溝墓の一部と思われる「L」字状の溝跡を検出した。そのため、翌日からは遺構の精査を開始、午後には遺構の写真撮影・実測を終了、26日には埋め戻しを行い、調査を完了した。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

3号方形周溝墓（第4図）

〔周溝の構造〕（北溝）西溝に連係するが、東端では下端が確認されていることから、一旦途切れるものと考えられる。開口幅60cm・溝底幅30cm前後、深さ18～27cmを測る。溝底は西溝ともに軟弱である。

〔西溝〕北溝に連係するが、南端では途切れる。長さ4.4m、開口幅60cm・溝底幅40cm前後、深さ16～31cmを測る。

〔覆土〕D-D'土層図を見る限りでは、内側からの覆土の流入が観察される。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から、土器小片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期。

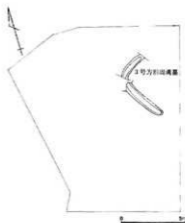
〔所見〕本遺構は全体に攪乱を受けているが、特に北西コーナーと北溝東端は攪乱が著しい。さらに、東側は調査区外であるため、その全容は不明であるが、出土土器が弥生時代後期に比定されることから一応、方形周溝墓と取り扱うことにした。基本形が北溝・西溝で1つの「く」字状を呈する、いわゆるブリッジをもつタイプの方形周溝墓と推測される。

3号方形周溝墓出土遺物（第5図）

出土土器は極めて少なく、図示できるものは2点のみであった。

1は壺形土器の口縁部から頸部にかけての小片である。複合口縁を呈する口縁部は、大きく外反し、口唇部には2本の棒状浮文が付される。文様は内面に単筋羽状縄文と「S」字状結節文が施される。また、内面口唇部近くに1個の円形赤彩文がみられる。外面は赤彩される。

2は甕形土器の小片である。外面にはハケ目、内面にはナデ調整が施される。

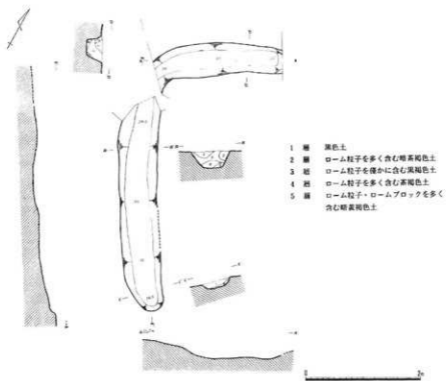


第3図 遺構分布図（1/300）

第3節 包含層出土の遺物

第6図1・2は表土剥ぎの際に、表土中から出土した土器皿である。

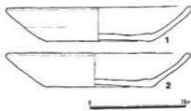
ともに、平底の底部から直線的に外傾し、口縁部はやや内湾する。ロクロ回転の方向は左回り。底部には回転糸切り痕を残す。遺存度はともに4/5程である。時期は19世紀に比定される。



第4図 3号方形周溝基 (1/60)



第5図 3号方形周溝基出土
遺物 (1/3)



第6図 包含層出土遺物 (1/4)

第3章 中野遺跡第18地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心とする遺跡である。遺跡は北方に柳瀬川を、西方に小支谷を臨むやや舌状に突出した台地上に立地する。標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、北側に行くにつれてゆるやかに標高が下がっている。遺跡の現状は、畑地を1/3程残し閑静な場所でもあるが、宅地化が急激に進行している地域でもある。本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和60年に実施され、以後の調査で弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の集落跡であることが知られている(佐々木・尾形 1985、佐々木 1989・1990・1991、尾形 1992)。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成3年7月8日から開始した。調査区の長軸に合わせ、2本のトレンチを設定、バックホーを使用し表土を剝ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区北東端より住居跡と思われる遺構1基を検出した。そのため、11日からは遺構の精査を開始し、出土土器より古墳時代後期の住居跡(19H)であることが判明した。15日には、住居北西コーナー付近床面上より鉄線が十



第7図 周辺の地形と調査地点(1/5000)

数点一括して出土した。17日午前中には、遺物出土状態の写真撮影を終了、午後には遺物を取り上げる。また、19日に切られる土坑（3D）の精査を開始し、土坑は縄文時代中期のものと判明した。3Dは同日、写真撮影・実測を終了した。

18日には、19Hの実測を終了、23日には埋め戻しを終了し、調査を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代

3号土坑（第9図）

〔構造〕9号住居跡に切られる。（平面形）円形か。（深さ）15cm。（覆土）ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。

〔遺物〕覆土中から土器小片が僅かに出土した。

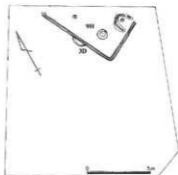
〔時期〕中期後半。

3号土坑出土遺物（第10図）

1・2は口縁部、3は胴部破片である。

1は口縁端部が肥厚し、LRの単節斜縄文を地文にもつ。

2は円形刺突文列の下に太めの沈線が1条施される。地文はLRの単節斜縄文。3は縦位に細い沈線が施される。



第8図 遺構分布図（1/300）

(2) 古墳時代

9号住居跡（第9図）

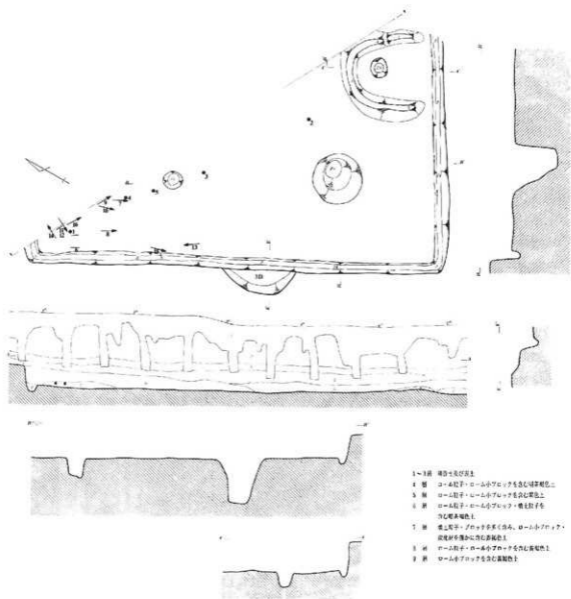
〔住居構造〕調査区内で確認されたのは、全体の1/3程であるため、詳細は不明である。（規模）不明×6.70m。（壁高）35～45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅15cm・下幅6cm前後、深さ6～14cmを測る。（床面）壁際を除いて、ほぼ全面硬く踏み固められている。（柱穴）南西コーナーの1本が支柱穴と思われる。開口部は直径80cmの円形で、深さは70cmを測る。（凸堤）南壁に付設される馬蹄形状の隆起帯で、高さ5cm前後、幅20～38cmを測る。凸堤の内側には、深さ23cmの小ピットをもつ。（覆土）6・7層を中心に焼土粒子を多く含むが、住居中央の3・5層には焼土粒子を含まない。堆積状態はレンズ状の自然堆積状態を示す。

〔遺物〕特に、北面コーナーの床面上から、鉄鏝が集中して出土したことに注目される。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕住居中央を除いた壁際から多くの焼土ブロック、焼土粒子が検出されたことより、本住居跡は壁構造に関連する部材の発火が要因で焼失した可能性がある。また、覆土は土層観察ベルトを見る限りでは自然堆積状態を示すが、4層以下にローム粒子・ローム小ブロックを多く含むことから、焼失後埋め戻されている可能性がある。

9号住居跡出土遺物（第11・12図）



第9図 3号土坑・9号住居跡 (1/60)



第10図 3号土坑出土遺物 (1/3)

土師器坏形土器(1)

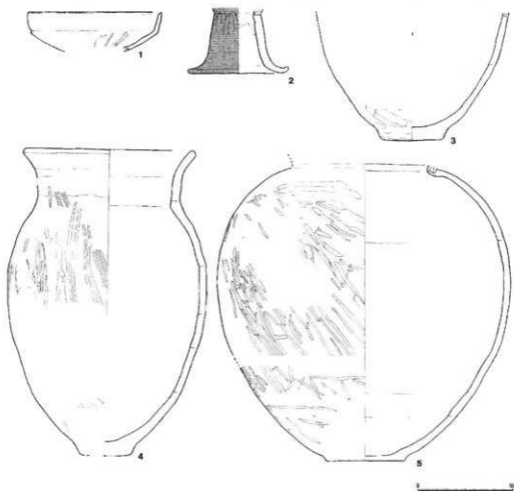
丸底の底部と口縁部の境に段をもつ段坏である。段はその上部に1条の沈線を巡らすことにより、段風に作出されている。口縁部は外反するのではなく、やや内湾ぎみに開く。口唇端部は沈線状に段をなしている。口縁部外面及び内面は横ナデ、外面底部は磨かれており、光沢を帯びる。内面底部には放射状の暗文が付される。住居北西コーナーの床面から10cm程浮いた覆土中の出土で、遺存度は1/3程である。

土師器高坏形土器(2)

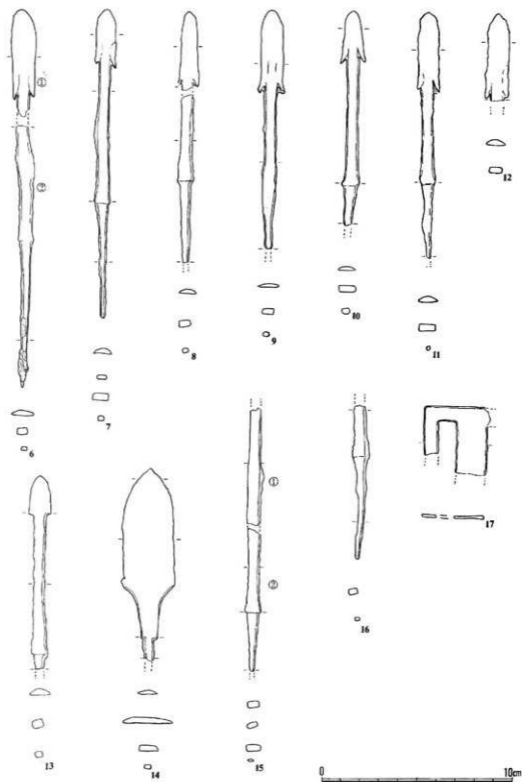
脚台部のみ遺存する。脚柱部は短いが直線的で、裾部は大きく外反する。裾端部は折り返し状に外側に丸くめくれている。裾部内外面は横ナデ、脚柱部は外面が縦方向にナデが施される。内面には横方向のヘラ削り後、薄く粘土がかけられている。この粘土は坏部との接合を強化させるものであろう。外面は赤彩される。住居中央付近の南壁寄りの床面上の出土である。

土師器甕形土器(3~5)

3は平底の底部から立ち上がり、やや丸味をもつ胴部に移行する。内面は先端がささら状を呈し



第11図 9号住居跡出土遺物1(1/4)



第12图 9号住居跡出土遺物2 (1/2)

図番号	計 測 値 (単位cm)							遺 存 度	備 考
	全 長	鎌 身 長	逆 難 幅	逆 難 幅 長	逆 難 幅 高	基 長	重 量 (地理研/地理院)		
6-①	(5.6)	4.7	1.1	(1.2)			11.6 / 10.0 g	鎌身部～逆難部	①・②は接合しない。
6-②	(13.8)			(6.1)	0.8	7.7		逆難部～基部	基部に炭化した木質片が付着。
7	16.2	3.1	1.1	13.7	0.8	6.1	11.9 / 12.0 g	ほぼ完形	
8	(13.0)	3.9	1.1	5.0	0.8	(4.3)	5.9 / 6.1 g	基部の一部欠損	鎌身部と逆難部は一接合。
9	(12.5)	4.3	1.4		0.7		7.9 / 8.1 g	基部の一部欠損	逆難部と基部の区別は不明瞭。
10	(11.2)	2.7	1.3	6.7	0.9	(2.1)	6.9 / 7.1 g	基部の一部欠損	逆難部は髹漆。
11	(13.0)	4.2	1.2	5.1	0.8	(3.9)	7.5 / 7.6 g	基部の一部欠損	
12	(4.6)	4.4	1.2	(0.5)			3.5 / 3.6 g	鎌身部	
13	(10.2)	2.0	1.1	7.4	0.8	(0.8)	9.4 / 9.4 g	基部の一部欠損	
14	(10.2)	6.2	2.7	2.7	0.9	(1.2)	17.7 / 17.8 g	基部の一部欠損	
15-①	(6.2)			(6.2)			3.3 / 3.4 g	逆難部	①・②は接合しない。
15-②	(7.5)			(4.4)	0.8	(3.1)	3.2 / 3.3 g	逆難部～基部	
16	(8.1)			(2.7)	0.9	5.4	3.1 / 3.1 g	逆難部～基部	

鉄鏡観察表

※ () 内の数字は残存部分での計測値。

た棒状のようなもので斜方向にナデられている。外面は磨きのなナデであろうか。住居中央付近や西壁寄りの床面上の出土で、胴部下半を2/3遺存する。

4は胴部中位に最大径をもち、頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はていねいにヘラナデされ、外面は器面の剥落がやや見られるが、胴部上半は縦方向に、下半は斜方向に緻密なヘラ磨きが施される。住居北西コーナーの床面上の出土で、遺存度は1/2程である。

5は平底の底部と大きな卵形の胴部をもつ。頸部以上は欠損するが、胴部上半に最大径を測り、肩部を有することから、頸部は「く」字状に大きく外反するものと思われる。内面はていねいにヘラナデされ、外面はナデ調整の後、斜方向にやや粗く磨き調整が施される。住居北西コーナーの床面上の出土で、頸部以下を1/2程遺存する。なお、5の実測図は、胴部上半と下半で接合できなかったため、上半と下半のそれぞれを実測した後、合成して作成したものである。

鉄製品(6～17・第2表)

6～16は鉄鏡である。詳細については第2表に示す。

17は用途不明の鉄製品。実測図の下方が欠損しているため、全容は不明。厚さは1mm程度で、覆土中の出土である。

(3) 鉄鏡の保存処理の経過

6～16のすべては、ほぼ同じ内容の保存処理を実施した。

- 発掘調査は平成3年7月18日に終了した。終了後はただちにエタノール洗浄、同時に錆取りなどの応急的なクリーニングを行う。その後、密閉したケース内にシリカゲル(乾燥剤)を入れ、冷蔵庫内で保管する。
- 平成4年6月15日、冷蔵庫から電子乾燥保管庫(オート・ドライ 東洋リビング株式会社)に移管する。湿度は40%に保つ。
- 平成4年6月17日、埼玉県立埋蔵文化財センターで、「金属製品の保存科学」の研修(平成4

年度埋蔵文化財担当者研修)により、エアブラッシュ[※]装置を用い、クリーニングを行う。

4. 翌18日、研修により合成樹脂による減圧含浸を行う。減圧槽に入れ、10～20mm/lgまで減圧し、エマルジョンタイプのアクリル樹脂(プラマルMV-1)[※]を注入する。
5. 6月23日、研修により復元作業を行う。接着剤には繊維素系樹脂(セメダインC)とエポキシ系樹脂(セメダインハイスーパー5)を使用する。特に隠蔽部の欠損など強度を要する箇所には、エポキシ系樹脂を用いる。欠損部の充てん・補彩には、錆粉とMV-1を混ぜたものを用いる。
6. オート・ドライに保管する、湿度は40%。

※オート・ドライの主な仕様

型式 ED-201、主な用途 マイコン・コントロール式、湿度コントロール 設定自動調節式、有効内容量 188ℓ、外形寸法 W40×D46×H123cm、消費電力 4W、重量 24kg

※エアブラッシュ装置

金属製品に害の少ない窒素ガスを使用し、パウダー(研磨剤)を吹きつけ、表面の汚れを除去する。今回使用した研磨剤はアルミニウム3パウダー。

※プラマルMV-1

米国Rohm & Haas社 製品の商品名。

第3節 ま と め

今回の調査で特筆すべきことは、住居跡北西コーナーの床面上から十数点にのぼる鉄鏝が一括出土したことである。残念なことに、住居跡の大部分は未調査区にあると考えられるため、まだ全体でどれだけの鉄鏝が埋もれているかは想像もつかない。また今後、未調査区域の調査が実施されたとしても、開発に伴う発掘調査では、敷地の境界にはブロック塀が築かれているため、調査区ぎりぎりまで調査を遂行することは不可能である。こういった点を考慮すると、本遺構の重要性をいかに理解することかで、今後の対策を講じる必要があらうかと痛感する。

出土した鉄鏝は、遺存状態は非常に良好であり、実測した個体数は13点、完形及び完形に近いものは8点にのぼる。鉄鏝は個体差が認められるものの、すべて両刃で片丸造に属するものである。なお、14については他のものに比べ、大きさ・重量が飛び抜けて大型品であることから、果たして鏝といつていいのか疑問に残るため、本稿でのコメントを控えるものとする。

鏝身部は、逆棘が脇袂で柳葉形を呈するものが大部分で、13は鏝身部がほぼ直角に屈曲して隠蔽部に移行する長三角形を呈する。

隠蔽部は、上面と下面がほぼ等しい長方形のものと、上面が下面より僅かに短く、断面が台形に近くなるものがある。隠蔽は明らかに棘状に突出するものが10で1点認められる他は、すべて隠蔽部から徐々に裾を広げたような形の関隠蔽のものである。基部が完全な形で残るものは、6・7・16で基本的に断面は、すべて長方形である。

これらについて、『埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ-鉄鏝について-』の分析を準用して

みると、6～8・11は長頸筒被腸袂片丸造柳葉式、10は長頸棘筒被腸袂片丸造柳葉式、13は長頸筒被片丸造長三角式に分類される。9は筒被部と茎部との境が不明瞭であるため、長頸無筒被腸袂片丸造柳葉式に分類されよう。

時期については、長頸筒被腸袂片丸造柳葉式・長頸筒被片丸造長三角式は、埼玉稲荷山古墳第1主体部出土例をもとにⅡ期（5世紀後半）に比定されている。長頸筒被片丸造長三角式は長頸筒被腸袂片丸造柳葉式よりやや後出するようである。長頸棘筒被腸袂片丸造柳葉式はⅢ期（6世紀前半から末葉）に比定されている。

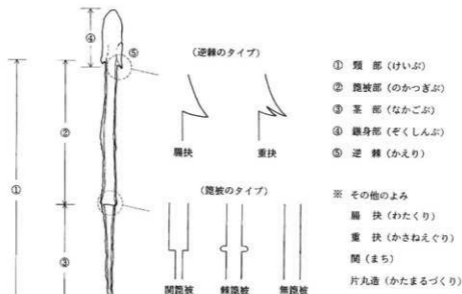
次に出土土器の時期について、若干触れることにする。

まず、環形土器は、推定口径14cmの須恵器環蓋模倣環である。段は、段上部に1条の沈線を巡らすことにより作出され、断面形は三角形状を呈する。口唇端部は、沈線状に段をなし、底部内面には放射状の暗文が付される。全体に受ける印象としては、外面には磨きが施され、調整もていねいな精巧なものと言える。

高環形土器は、脚台部のみで、脚柱部はやや短くなっているが、裾部で大きく開くという和泉式土器の特徴を残している。

甕形土器は、3点出土しているが、いずれもまだ胴部に丸味をもつものである。4は胴部中位に最大径をもつもので、城山遺跡51H-7に類似する。5は胴部上半に最大径をもつ壺状のもので、頸部から口縁部にかけては、「く」の字状に大きく開くものと思われる。調整は3点とも磨きをていねいに施すことを特徴とし、特に4はヘラ磨きといってもよいほど緻密な磨き調整が施される。

このことから、本住居跡出土の土器は古墳時代後期の鬼高式期のものに比定される。特徴としては、前段階の和泉式土器の要素を残しながらも、模倣環という新しい要素を取り入れた段階のものといえるかもしれない。特に甕形土器の長胴化が完成していないことと4の甕形土器が城山遺跡51



第13図 鉄鏃の各名称とよみかた

H-7 (城山遺跡Ⅲ期)に類似することを重視し、大まかに6世紀中葉に比定したい。

次に、鉄鎌の年代と出土土器の年代の対比であるが、今回出土した鉄鎌の中でその主体となるものは、5世紀後半に比定されている長頸鑿被腸袂片丸造柳葉式である。これは、出土土器の時期と比較すると、かなり古い様相を呈していると言える。しかし、その時期を上限とし、新しい要素である長頸鑿被腸袂片丸造柳葉式の6世紀前半から末葉を下限とするとしたら、出土土器の年代はその範囲内にうまく符号するようである。

以上、鉄鎌に関しては、その特徴についての思考のみに留まり、その出土が本当に意味する真意については触れることができなかった。毎回のことであるが、我々の先人が貴重な情報を我々に何度も何度も与えてくれているにもかかわらず、それに応えるほどの力量を持ち備えていないこと、そして、それについての研究を怠っていたことへの反省でいっぱいである。

また、今回は個人専用住宅の再開発(建て替え)という狭小な面積(171.44㎡)での調査でありながら、こうした予想もしなかった成果を得たことは、改めて小規模開発に伴う調査の必要性を実感した思いである。

末筆ながら、鉄鎌の保存処理にあたり、御指導を賜った埼玉県立埋蔵文化財センター、特に講師でもあった岩本克昌学芸員、野中 仁調査員には厚く感謝する次第である。

[引用・参考文献]

- 小久保徹・浜野一重他 1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究 I - 鉄鎌について -」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集
- 佐々木保俊 1989「中野遺跡第6 a・6 b地点の調査」『志木市遺跡群 I』志木市の文化財第13集
- 1990「中野遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群 II』志木市の文化財第14集
- 1991「中野遺跡第7・8地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第14集
- 尾形則敏 1992「中野遺跡第12地点の調査」『志木市遺跡群 IV』志木市の文化財第17集

图 版



調査区近景



確認調査風景



3号方形周溝墓



3号方形周溝墓出土遺物



包含層出土遺物



調査区近景



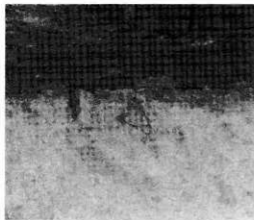
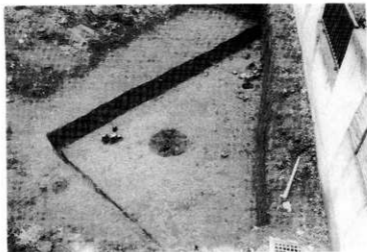
発掘風景



古墳時代9号住居跡

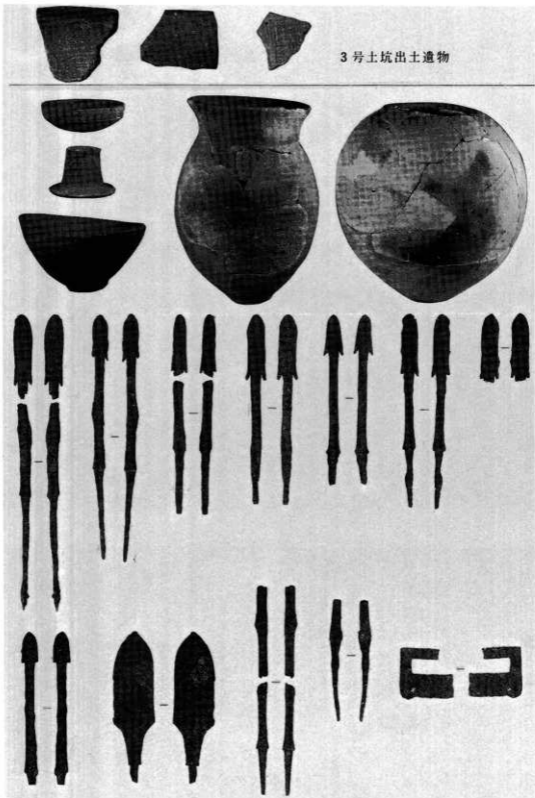


9号住居跡遺物出土状態



鉄錐出土状態

9号住居跡遺物出土状態



9号住居跡出土遺物

志木市の文化財 第20集

志 木 市 遺 跡 群 V

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成5年7月1日
印 刷 佛 丸 文 堂